



「21世紀の隣人たち」ともに生きる「私たちのメッセージ展・金沢」を開催して 金沢・多文化共生まちづくり事業がスタート

(財)金沢国際交流財団

はじめに

次々と入ってくる人の波の中で、曇り空とは対照的なカラフルなパネルが並んだ「21



↑当日のパネル展の様子

世紀の隣人たち」のパネル展が、去る二〇〇五年一月一日から六日まで、金沢21世紀美術館で開催されました。金沢とともに暮らす隣人同士の出会いがあらちこちらに生まれた会場には、会期中の五日間で二二〇〇名にも上る市民が来場しました。これだけの来場者数を記録した屋内の事業は、(財)金沢国際交流財団(以下、財団)では初めての経験でした。

金沢の現状

金沢市は人口約四六万人の中核市であり、四一九一人(二〇〇五年四月一日現在)の外国人市民が暮らしています。つまり、金沢市民の約一〇〇人に一人が、外国人市民という割合です。国籍別では中国と韓国・朝鮮の方がそれぞれ一〇〇〇人を超えているほかは、七〇カ国以上の多様な国籍の人々が暮らしています。しかし、地域社会のマジヨリティである日本人市民は、この現状をほとんど知ることはなく、多文化化

している地域の状況についてリアリティを持って受け止めていないのが現状です。

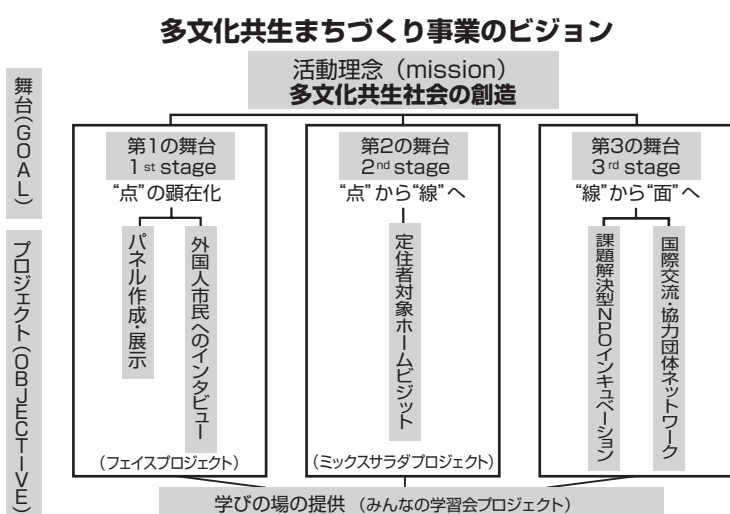
多文化共生研究会が生まれるまで

財団では、二〇〇三年二月に(特活)多文化共生センター理事(当時)の阿部一郎さんを迎えた講演会を開催し、それが契機となり、二〇〇四年度に「多文化共生まちづくり事業」を立ち上げました。二〇〇四年五月には、(財)自治体国際化協会(以下、CLAIR)の自治体国際協力アドバイザー制度を利用して、再度阿部さんを招き、多文化共生を理解するためのワークショップを開催しました。そのときの参加者が、財団の呼びかけに応じて結成したのが、今回ご紹介する事業の中心的な役割を果たすことになったボランティアグループ「多文化共生研究会」(以下、多文研)です。多文研は、当初から財団とは別の組織として位置付けられており、活動内容についても、その都度財団と協議の上、決定しています。

二〇〇五年一〇月現在の多文研の会員数は三二人で、外国人市民四人を含んだ年代も職業も多様な市民で構成されています。

多文化共生まちづくり事業の全体像

この事業の特徴の一つは、外部から専門家をプログラムオフィサー(以下、PO)として招き、事業の方向性や活動の内容について



て随時必要なアドバイスを受けていることです。当初は、「多文化共生社会の実現」という漠然とした目的しか決まっていなかった多文化共生まちづくり事業でしたが、POの手によって、上図のようなビジョンが組み立てられました。

縦方向にミッション(理念)、ゴール(当面の目標)、オブジェクト(手法)が整理され、横方向には、多文化共生社会へ向かう段階として、第一から第三の舞台が用意されています。ビジョンについて、財団POの阿部さんに説明をいただきました。

「金沢や京都のように長い年月をかけて豊かな文化を育んできた地域では、多くの市民が自らの地域文化をアイデンティティとして保有するわけですが、その反面、外から入ってくる人々や異なる文化に対しては閉鎖的になることがあります。そこで、まずは芸術文化を媒体として、地域の中に埋もれている多様な文化を表出させ、多くの金沢の人々に認知してもらおうとしたのが、第一の舞台に位置する今回のパネル展(フェイスプロジェクト)です。いわゆる“点の顕在化”ですね。ただし、この段階で終わってしまつては、従来の異文化情緒を味わう領域から抜け出すことができません。そこで、第二の舞台では、顕在化した点を“線”にすることを目標に掲げました。これは、地域の中で孤立している外国人市民を日本人市民やほかの外国人市民とつなげるということです。つながることで市民間の相互の理

解は進みますし、やがて次の活動を生み出す力になります。ここでは、つながる場を“生活空間”に設定しています。具体的なプログラムとしては、歩いて行き交うことのできる小学校区単位で、国際交流協会等が保有しているノウハウの一つであるホームビジットの事業を行います。ただし、対象者は“定住者”です。ホームビジットのような国際交流の代表的なプログラムでも、対象者等を変えるだけで、多文化共生の取組みになり得るのです。そして第三の舞台では、“線”から“面”へをテーマに、多文化共生の取組みの広がりを目指しました。ここには、多様な人々がつながるネットワークの形成と合わせて、外国人市民のエンパワメントを掲げています。具体的には、外国人市民が中心となる、または外国人市民がかかわるNPOのインキュベーションを行います。対象となるNPOの活動領域は、今後外国人市民の定住化がさらに進むと、外国人市民の抱える問題や課題も多様化していくことから、あえて国際交流の分野に限定していません。それから今後の話になりますが、実はこの次に第四の舞台も考えています。“面”から“立体”を目指す部分で、いわゆる多文化共生社会に向けた制度・仕組みの整備を考えていくところです。ただこの部分については、現段階では議論不足といったところでしょうか。未定の第四の舞台も含めて、これらすべての舞台のプログラムが同時並行的に進むことが大切で

す」。

フェイスプロジェクトとは

このように複数の舞台で構成される「多文化共生まちづくり事業」ですが、今回紹介する「フェイスプロジェクト」は、21世紀の隣人たちが「第一の舞台に当たる活動です。金沢市民がリアリティを持って感じられない外国人市民の存在や思いを、芸術文化を媒体として表出させることで、外国人市民の背景にある多様な文化を、地域の貴重な資源として多くの市民に認知してもらおうことを目的としています。ここでは、「写真」を媒体としました。外国人市民をはじめとする多様な金沢市民の顔写真と心のメッセージをパネルに掲載し、新しい文化の創造の場である金沢21世紀美術館で展示することによって、このプロジェクトを文化の視点、つまりまちづくりの活動の一環として位置付け、国際交流に関心のない市民を

含めた多様な市民の参加を目指しました。そして二〇〇五年度、CLAIRの先導的支援施策事業の助成を得て、フェイスプロジェクトは実現する運びとなりました。

パネル展の実現まで

作成したパネルには、写真とともにメッセージが掲載されていますが、これは多文研のメンバーが中心となつて、地域に暮らす外国人市民(二九カ国五七名)に日本人市民を加えて、総勢八六名の市民と直接出会い、インタビューを行いました。その前には、相手に共感しながらインタビューを行うた

めのワークショップを開催しました。ここでもインタビューボランティアとして、多くの市民をボランティアとして巻き込むことができました。インタビューは、「金沢の好きな場所とその理由」と「五年後の金沢に期待すること」の二つの質問を中心に行われました。また、パネル展示に当たっては、デザイナーや設計士といった多様なノウハウをもった市民がボランティアとしてかわり、ここでも市民が主体となった活動が展開されました。

これまでを振り返って

もちろんフェイスプロジェクトのすべてが順風満帆に進んだわけではありません。パネル展を開催するまでのプロセスでは、多くの市民が自主性を発揮した一方で、役割分担やスケジュール設定の不十分さから、ときには市民と財団との間に誤解や摩擦が生じたときもありました。しかし、そのような経験を通して、市民との協働では、対等性が保障されたコミュニケーションの重要性を学ぶことができましたし、共通の目標に向け、共に汗をかいたときにこそ、より良い成果につながることを実感しました。この経験を糧にして、これからは地域の隣人同士が、自らを語り合いながら、すべての人々が暮らしやすい多文化共生のまちづくりを進めていきます。



↑パネル展のチラシ



↑登場したパネルと一緒に記念撮影